

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月10日現在

機関番号：32639
 研究種目：特定領域研究（計画研究）
 研究期間：2007～2012
 課題番号：19046005
 研究課題名（和文） 社会行動の文化・制度的基盤

研究課題名（英文） Cultural and Institutional Foundations of Social Behavior

研究代表者
 山岸 俊男（YAMAGISHI TOSHIO）
 玉川大学・脳科学研究所・教授
 研究者番号：80158089

研究成果の概要（和文）：本研究は、利他性、互酬性、公平性などのヒトの社会性が、そうした行動を適応的とする社会的ニッチの構築を通して形成維持されるとする理論モデルを構築し、モデル検証のための一連の実験研究を実施することで、これまで文化心理学や比較文化心理学が扱ってきた認知や行動の“文化差”を、人々が創り出す社会的ニッチとしての制度（つまり、人々の行動が生み出す誘因構造）への適応行動として分析する観点の有効性を証明した。

研究成果の概要（英文）：This study established the social niche construction model of human sociality and demonstrated its efficacy and validity through a series of experimental studies. The findings from those experiments proved that cultural differences in human cognition and behavior that have been studied by cultural and cross-cultural psychologists from the point of view of self-construal can be analyzed as a means of adaptation to the social niche (that is, a stable incentive structure consisting of people's responses to the social niche itself).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	12,000,000	0	12,000,000
2008年度	12,500,000	0	12,500,000
2009年度	11,400,000	0	11,400,000
2010年度	13,400,000	0	13,400,000
2011年度	13,400,000	0	13,400,000
2012年度	11,700,000	0	11,700,000
総計	74,400,000	0	74,400,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：文化、制度、均衡、認知、信念、適応、進化、集団

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、人間の社会性の進化的基盤に関する関心が、生物学や心理学のみではなく、経済学を始めとする社会科学において大きな高まりを見せていた。この新しい動きの背後には、経済学者自身の手により進められた、実験参加者たちの行動が合理的に自己利益を追求する“経済人（ホモエコノミクス）”の仮定に反することを示す実験結果の蓄積が存在していた。そして、これらの実験結果の蓄積に代表される人間の“非合理性”および広い意味での“利他性”の説明原理として、“適応性”の概念が採用される兆しを見せていた。生身の人間が“経済人”ではないのは、特定のかたちでの“社会性”を備えた人間が、そのような特性を備えていない“純粋に合理的”な人間よりも、人類の進化環境においてより適応的であったからという説明である。こうした社会科学をめぐる背景の下、本研究は、人間が示す利他性、互酬性、公平性などをヒトの進化環境に対する適応を促進するために進化した“心の道具”として捉え、その具体的な内容を明

らかにすると同時に、そうしたヒトの社会性が現代の社会環境の中でどのようにして維持されているかを明らかにすることをめざして計画された。この目的の達成に向けて、通常は“文化”の違いとして理解されている認知・信念システムの集団差が異なる“制度”（すなわち、自己維持的・信念・誘因結合体）への適応行動としてより適切に理解できること、すなわち、人間の本質的社会性が異なる制度（人々の適応行動により形成・維持される誘因構造）への適応を促進するための「文化・心理的道具」として働いていることを明らかにするための、一連の実験研究の必要性が認識された。

2. 研究の目的

近年における認知科学・脳神経科学の急速な発展は、社会科学の基礎を提供する人間観に対して大きな影響を与えつつある。社会科学の内部においても、行動経済学や神経経済学など、人間の本質的社会性に目を向ける動きが始まっている。本研究の目的は、人間の社会性

の解明を進めることで、本領域全体のテーマである社会科学における実験研究の確立に向け、その重要な一環を担うことにある。本研究の特色は、人間の心の社会性の究極因である社会的適応課題に目を向け、人間の適応行動が適応環境(=人々の行動パターンの分布により生み出される誘因構造としての「制度」)そのものを生み出し、その結果自己維持的な信念体系であると同時に誘因構造でもある「制度」を形成するとする、制度アプローチにある。本研究は、この制度アプローチを心の文化差の説明に適用することを通して、文化への制度アプローチの視点から、人間の心と社会の相互構築関係の解明をめざす。

具体的な目標として、以下の目標を設定した。

(1) 認知・信念システムの文化差に関する比較文化研究を実施し、心の文化差の具体的なあり方を明らかにする。

(2) 集団内および集団間における信頼行動、協力行動、攻撃行動、制裁行動等に関する差を測定する実験を実施することで、集団を基盤とした上述の行動を、集団内における相互扶助関係への適応行動として理解すべきか、それとも集団間葛藤への適応行動として理解すべきかを検討する。

(3) これまでの研究の蓄積により相互協調的文化と相互独立的な文化の下では、それぞれ独自の自己観を核とする認知・信念・行動のあり方が維持されていることが示されている。こうした認知・信念・行動の差が、それぞれの文化において維持されている誘因構造への適応として理解できることを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) の目的を達成するために、認知的不協和、原因帰属、注意配分(表情判断課題、記憶課題、画像判断課題、注視課題)、人間性と社会の性質についての信念や、適応戦略の有効性に関する実験データを蒐集した。

(2) の目的を達成するために、自集団成員と他集団成員に対する信頼行動、協力行動、攻撃行動、制裁行動に関する差を、自集団および他集団の成員が参加者本人の集団所属性について持つ情報を操作しつつ測定する実験を実施した。

(3) の目的を達成するために、一般市民から募集した実験参加者に対して、社会関係の在り方を変化させた複数の経済ゲーム実験を繰り返し実施し、異なる誘因構造を持つゲーム圏での行動の一貫性を検討すると同時に、これまでの研究で文化差の存在が示されている認知・信念・行動課題を同じ参加者に実施し、文化差と関連する認知・信念・行動の特性が、誘因構造の違いとどのように関連するかを調べた。

4. 研究成果

以下、主要な研究成果を列記する。

(1) 現在、ヒトの利他性の進化的説明原理として集団内利他行動と集団間攻撃行動との共進化を想定する群淘汰理論が主として経済学者・人類学者の間で広まりつつある。この理論に基づき、ヒトには規範に反する他者を罰する傾向が進化的に組み込まれているとする強い互酬性理論を支持する実験的証拠として、最後通告ゲームにおいて不公平提案を受けた実験参加者が、自分でコストを支払うことになってまでそうした不公平な提案を拒否し、そのことに

よって提案者の利益を大幅に低下させる行動、すなわち不公平提案の拒否行動がこれまで用いられてきた。本研究で実施した一連の実験結果は、最後通告ゲームにおける不公平提案の拒否は、公平性を追求する動機に基づき規範逸脱を罰する行動ではなく、自分の社会的地位を確保するための行動であることを明らかにした。

① まず雑誌論文 44 では、不公平提案者を拒否することで提案者と自分との利益差を拡大する(つまり不公平提案者を金銭的にも心理的にも罰することができない) 一方的最後通告ゲームにおいても、不公平な提案を受けた参加者の多くが自分の利益を捨て去ってまで不公平な提案を拒否する行動を取ることを明らかにした。(下の図を参照されたい。Ultimatum Game は通常最後通告ゲーム、Impunity Game は拒否をした参加者のみが利益を失う一方的最後通告ゲーム、Private Impunity Game は、参加者が拒否したことが提案者に伝わらないかたちでの一方的最後通告ゲーム)

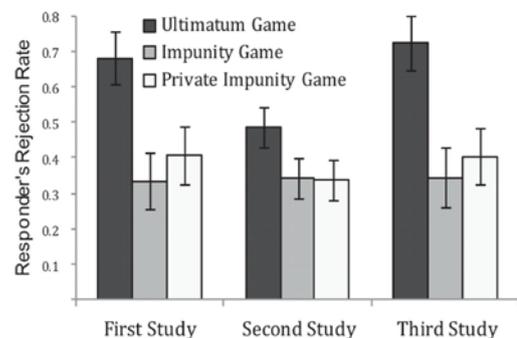


Fig. 2. Rejection rate of 800/200 offers in the 3 games in the 3 studies. Error bars, SEs.

② 上述の結果に加え、雑誌論文 13 では、最後通告ゲームでの実験参加者の行動を、信頼ゲーム、囚人のジレンマゲーム、独裁者ゲームでの行動と比較し、最後通告ゲームで不公平提案を拒否する傾向の強い参加者は、どちらかといえば他のゲームで非協力的ないし非利他的な行動を取りやすいことを明らかにし、最後通告ゲームでの不公平提案の拒否が公平性追求行動とは言い難いことを明らかにした。

③ 社会心理学における社会的アイデンティティ理論を基にした実験結果は、群淘汰理論の一つの実証的基盤をなしているが、雑誌論文 14 では、人々が自集団の人間を信頼する理由が自集団へのアイデンティティにあるのではなく、人々が一般に自集団の人間を優遇するという信念を人々が共有しているからであることを明らかにしている。

④ また、現在投稿中の論文にまとめた研究では、集団間攻撃行動を測定する新たな方法として先制攻撃ゲームを開発し、相手からの攻撃行動の可能性が存在する場合には人々はコストを払っても相手を攻撃する傾向を持つが、そうした相手から攻撃を受ける可能性がない場合には、外集団に対して自ら進んで攻撃行動を行う傾向を持たないことを明らかにした。同様の知見は、シカ狩りゲームを用いた実験(投稿中)においても確認されている。

(2) これまでの文化心理学における研究を通して文化差の存在が明らかとされている認知・信念・行動をとりあげ、そうした文化差がそれぞれの社会における制度（すなわち、人々の行動パターンが作り上げている誘因構造）への適応行動として理解できること、またそうした適応行動が制度そのものを構成していることを明らかにする一連の実験研究を実施し、その結果を図書5の総説論文、図書6の概説書としてまとめた。これらの総説には、以下の研究成果が紹介されている。

①行動の社会的な帰結から解放された“社会的真空状態”を実験室に作り出すことで、同調への選好、独自性への選好の文化差が生み出すとされてきた日米間の同調行動の文化差が消滅することを明らかにした（雑誌論文16、26、48）。

②同様にして社会的帰結ないし他者からの評判から解放された“社会的真空状態”では、日本人の自己卑下傾向が消滅し、アメリカ人と同様に自己高揚傾向を示すこと、また逆に、社会的帰結ないし他者からの評価が明白な状況においては、アメリカ人も日本人同様の自己卑下傾向を示し、自己卑下・自己高揚の日米文化差が消滅することを明らかにした（雑誌論文15）。（下の図では、自分が受けた知能テストの成績が大学平均よりも上か下かを判断するように求められると、日本人は自己卑下的に応える傾向が見られるのに対して、アメリカ人（特に男子）は自己高揚傾向を示していた。しかし自分の成績の評価が正しければボーナスが与えられるボーナス条件では、日本人もアメリカ人同様の自己高揚傾向を示すようになり、日米の文化差はほぼ完全に消滅した。

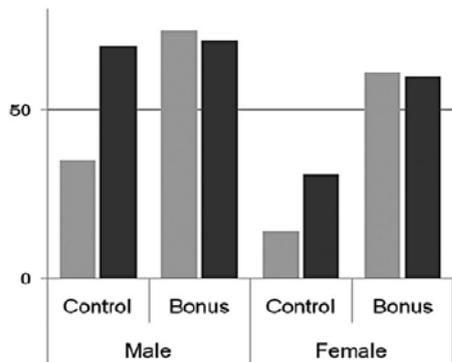


Figure 3 Proportion of the Japanese and American participants who answered 'above average' concerning their performance in the control and the bonus conditions broken down by the participant's gender. ■, Japanese; ■, American.

③これまでの文化心理学の研究において“相互協調的自己観”として扱われてきた信念群が、実は他者との協力関係の追求と、他者からの排除を避ける傾向との二つに概念的に分離できることを明らかにしたうえで、日米の文化差は主として後者の側面に顕著であること、前者の側面に関しては文化差が見られないことを明らかにした（雑誌論文1）。

これら①②③の知見は、文化特定の行動の多くが、他者の反応の“読み”を可能とする制度（人々の行動パターンが作り上げている誘因構造）への適応行動であることを明らかにしている。

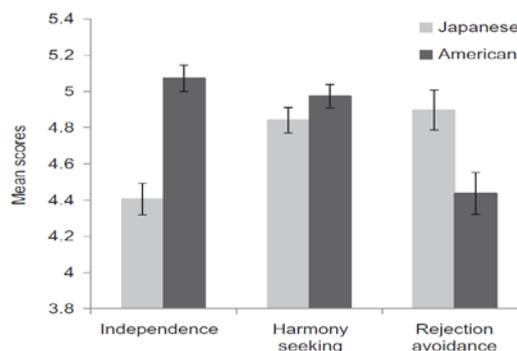


Figure 2 Mean scores of the independence, harmony seeking, and rejection avoidance scales in Study 3. Error bars represent standard errors.

(3) 利他性、互酬性、公平性などの人間の社会性を説明する原理として現在最も広く使われているのは“選好”の概念である。すなわち、人間が自己利益のみを目指して行動するのではなく、他者の利益、あるいは公平性を考慮に入れて行動するのは、そうした行動の結果として生まれる社会状態に対する選好を人々が有しているからだという基本的な視点である。この視点は人々の行動の記述としては（同義反復という意味で）正しいが、人々がそうした選好を一貫したかたちで内面化しており、また一貫した選好に基づいて一貫した行動を取っているという保証がない限り、人々の実際の行動の説明原理としては有効性を持たない。そこで問題とされるのは、人々は実際に異なる状況下でどの程度“選好”に基づき一貫した行動を取っているかである。この問題に対する回答を与えるために、囚人のジレンマゲーム、社会的ジレンマゲーム、信頼ゲーム、信仰ゲーム、独裁者ゲーム、最後通告ゲーム、シカ狩りゲーム、先制攻撃ゲームを同一参加者に3年半の年月をかけて実施した（異なるゲーム間に数か月の時間差を取ることで、一つのゲームでの行動が他のゲームでの行動に直接反映される可能性を極力低める手続きが取られた）。その結果、選好のみに基づいて行動が決定されるはずの独裁者ゲームや最後通告ゲームでの受け手の行動が、相手の行動の予測に応じて自分の手を変更する必要がある囚人のジレンマゲーム、信頼ゲーム、信仰ゲームでの行動と一貫しないこと、また同時に、後者のゲーム間では行動に強い一貫性が見られることが明らかにされた。これらの結果は、人間の行動の社会性を単純に一貫した選好により説明することの限界を明らかにすると同時に、他者の行動原理に関する信念が人間の社会行動に対して極めて重要な意味を持っていることを明らかにしている。こうした信念は制度としての誘因構造を反映する一方、制度の構築に重要な役割を果たすものであり、そのため上述の知見は、本研究の目的である、ニッチ構築を通して適応行動を作り出していく存在として人間性を理解する、文化と社会に対する制度アプローチ（ニッチ構築アプローチ）の重要性を示すものである。

(4) 上述の(3)で紹介されている研究成果は、これまで文化心理学・比較文化心理学で蓄積されてきた多くの知見の蓄積の上に生み出されている。本研究においてもこうした知見の積み重ねが続けられており、目標と過程への相対的注目度、配偶戦略と薬物嗜好の関係、幸福観、遺伝子多形、自尊感情、注意配分、恥と怒り、リーダーの顔認知、笑顔の認知、単純接触効果、感情、集団との同一化等についての

文化差の研究がすすめられた。また、日本における制度的環境の変化と、それにまつわる幸福感などの心理的適応・不適応のメカニズムについての実証的検討を進め、グローバリゼーションに伴う個人主義化が、日本において幸福感を低減させ、ひきこもりなどの不適応をもたらす仕組みを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔雑誌論文〕(計 61 件)

- 1) H.Hashimoto & T.Yamagishi (印刷中) Two faces of interdependence: Harmony seeking and rejection avoidance. 査読有 *Asian Journal of Social Psychology*. 10.1111/ajsp.12022
- 2) K.Ishii (4名中3番目) (印刷中) Cultural variation in the focus on goals versus processes of actions. *Personality and Social Psychology Bulletin*. 査読有 10.1177/0146167213483579
- 3) K.Ishii (5名中2番目) (印刷中) Individual differences in reproductive strategy are related to views about recreational drug use in Belgium, the Netherlands and Japan. *Human Nature*. 査読有 10.1007/s12110-013-9165-0
- 4) T.Yamagishi (2013). Reply to Egloff et al.: On the relationship between positive and negative reciprocity. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 110 (9): E787. 査読有 10.1073/pnas.1222349110
- 5) T.Yamagishi (他9名) (2013) Is behavioral pro-sociality game-specific? Pro-social preference and expectations of prosociality. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 120, 260-271. 査読有 10.1016/j.obhdp.2012.06.002
- 6) Y.Uchida (8名中6番目) (2013) Residential mobility increases motivation to expand social network: But why? *Journal of Experimental Social Psychology*, 49, 217-223. 査読有 10.1016/j.jesp.2012.10.008
- 7) 内田由紀子・荻原祐二 (2012) 文化的幸福観: 文化心理学的知見と将来への展望. *心理学評論*, 55, 26-42. 査読有 <http://www.sjpr.jp/psychologia/vol55/vol55-1-026.html>
- 8) Y.Uchida (3名中2番目) (2012) Caught between culture, society, and globalization: Youth marginalization in postindustrial Japan. *Social and Personality Psychology Compass*, 6/5, 361-378. 査読有 10.1111/j.1751-9004.2012.00436.x
- 9) 石井敬子 (2012) 遺伝子と社会・文化環境との相互作用: 最近の知見とそのインプリケーション. *感情心理学研究*, 20, 19-23. 査読有 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsre/20/1/20_19/_pdf
- 10) K.Ishii (他2名) (2012) High self-esteem increases spontaneous attention to positive information: An event-related brain potential study. *Psychologia*, 55, 269-279. 査読有 <http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/Ishii%20et%20al%202012%20SE.pdf>
- 11) K.Ishii (4名中3番目) (2012) Do surrounding figures' emotions affect judgment of the target figure's emotion?

Comparing the eye-movement patterns of European Canadians, Asian Canadians, Asian international students, and Japanese. *Frontiers in Integrative Neuroscience*, 6, 72. 査読有

10.3389/fnint.2012.00072

- 12) Y.Uchida (4名中3番目) (2012) Condoned or condemned: the situational affordance of anger and shame in the US and Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39, 540-553. 査読有 10.1177/0146167213478201
- 13) T.Yamagishi (他9名) (2012) Rejection of unfair offers in the ultimatum game is no evidence of strong reciprocity. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 109 (50), 20364-20368. 査読有 10.1073/pnas.1212126109
- 14) T.Yamagishi (5名中3番目) (2012) Two experimental tests of trust in in-group strangers: The moderating role of common knowledge of group membership. *European Journal of Social Psychology*, 42, 30-35. 査読有 10.1002/ejsp.852
- 15) T.Yamagishi (他9名) (2012). Modesty in Self-Presentation: A Comparison between the U.S. and Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, 15, 60-68. 査読有 10.1111/j.1467-839X.2011.01362x
- 16) T.Yamagishi (他2名) (2012) Stadtluft macht frei (City air brings freedom). *Journal of Cross-cultural Psychology*, 43(1), 38-45. 査読有 10.1177/0022022111415407
- 17) 内田由紀子 (他2名) (2012). 人間関係のスタイルと幸福感: つきあいの数と質からの検討『実験社会心理学研究』52, 63-75. 査読有 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/52/1/52_63/_pdf
- 18) V.Norasakkunkit & Y.Uchida (2011) Psychological consequences of post-industrial anomie on self and motivation among Japanese youth. *Journal of Social Issues*, 67, 774-786. 査読有 10.1111/j.1540-4560.2011.01727.x
- 19) K.Ishii (5名中2番目) (2011) Found in translation: Cross-cultural consensus in the accurate categorization of male sexual orientation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 37, 1499-1507. 査読有 10.1177/0146167211415630
- 20) K.Ishii (3名中2番目) (2011) Cross-cultural impressions of leaders' faces: Accuracy and consensus. *International Journal of Intercultural Relations*, 35, 833-841. 査読有 10.1016/j.ijintrel.2011.06.001
- 21) K.Ishii (他3名) (2011) When your smile fades away: Cultural differences in sensitivity to the disappearance of smiles. *Social Psychological and Personality Science*, 2, 516-522. 査読有 10.1177/1948550611399153
- 22) K.Ishii & S.Kitayama (2011) Outgroup homogeneity effect in perception: An exploration with Ebbinghaus illusion. *Asian Journal of Social Psychology*, 14, 159-163. 査読有 http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/OH_final.pdf
- 23) K.Ishii (2011) Mere exposure to faces increases attention to vocal affect: A cross-cultural investigation. 『認知科学』18, 453-461. 査読有

- <http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/jcss2011.pdf>
- 24) K.Ishii (2011) Changes in background impair fluency-triggered positive affect: A cross-cultural test using a mere-exposure paradigm. *Perceptual and Motor Skills*, 112, 393-400. 査読有
http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/Ishii_mere%20exposure_rev.pdf
- 25) J.Liu, T.Yamagishi (他6名)(2011) Unbalanced triangle in the social dilemma of trust: Internet studies of real-time, real money social exchange between China, Japan, and Taiwan. *Asian Journal of Social Psychology*, 14 (4), 246-257. 査読有
10.1111/j.1467-839X.2011.01353.x
- 26) H.Hashimoto, Y.Li & T.Yamagishi (2011) Beliefs and preferences in cultural agents and cultural game players. *Asian Journal of Social Psychology*, 14(2), 140-147. 査読有
10.1111/j.1467-839X.2010.01337.x
- 27) K.Ishii (3名中2番目)(2011). Misery loves company: When sadness increases the desire for social connectedness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 37, 1438-1448. 査読有
10.1177/0146167211420167
- 28) Y.Uchida (3名中3番目)(2011) Unable to conform, unwilling to rebel? youth, culture, and motivation in globalizing japan. *Frontiers in Psychology*, 2, 207. 査読有
10.3389/fpsyg.2011.00207
- 29) T.Yamagishi (11名中10番目)(2010). Salivary alpha-amylase levels and big five personality factors in adults. *Neuroendocrinology Letters*, 31(6), 101-104. 査読有
<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/21196913>
- 30) T. Yamagishi (11名中3番目)(2010) Salivary testosterone levels and autism-spectrum quotient in adults. *Neuroendocrinology Letters*, 31(6), 837-841. 査読有
<http://europepmc.org/abstract/MED/21196912/reload=0;jsessionid=oz7qoRydjoCVKx8doDtJ.6>
- 31) S.Tanida & T.Yamagishi (2010) Testing social preferences through differential attention to own and partner's payoff in a Prisoner's Dilemma game. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 1(2), 31-34. 査読有
10.5178/lebs.2010.8
- 32) 品田瑞穂・山岸俊男 (他9名)(2010) 他者の協力行動の推測の正確さを規定する要因『心理学研究』81(2), 149-157. 査読有
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy/81/2/81_2_149/_pdf
- 33) T.Yamagishi (6名中3番目)(2010) Inter-subjective culture: The role of intersubjective perceptions in cross-cultural research. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 482-493. 査読有
10.1177/1745691610375562
- 34) T.Yamagishi (6名中6番目)(2010) Neural correlates of the rejection of unfair offers in the impunity game. *Neuroendocrinology Letters*, 30(4), 496-500. 査読有
<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/20010492>
- 35) T.Yamagishi (5名中5番目)(2010) Theory of mind enhances preference for fairness. *Journal of Experimental Child Psychology*, 105, 130-137. 査読有
10.1016/j.jecp.2009.09.005
- 36) T.Yamagishi (5名中4番目)(2010) Emotional expressivity as a signal of cooperation. *Evolution and Human Behavior*, 31, 87-94. 査読有
10.1016/j.evolhumbehav.2009.09.006
- 37) Y.Uchida (3名中2番目)(2010) Culture and mixed emotions: Co-occurrence of positive and negative emotions in Japan and the U.S. *Emotion*, 10, 404-415. 査読有
10.1037/a0018430
- 38) 高橋知里・山岸俊男・橋本博文(2009) 集団からの排除と相互協調的自己呈示『社会心理学研究』25(2), 113-120. 査読有
http://ci.nii.ac.jp/els/110007504747.pdf?id=ART0009335410&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1370839434&cp=
- 39) S.Oishi, K.Ishii & J.Lun (2009) Residential mobility and conditionality of group identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 913-919. 査読有
<http://dx.doi.org/10.1016/j.jesp.2009.04.028>
- 40) Y.Uchida & S.Kitayama (2009) Happiness and unhappiness in east and west. *Emotion*, 9, 441-456. 査読有
<http://psycnet.apa.org/journals/emo/9/4/441/>
- 41) M. Rigdon., K. Ishii (他2名)(2009) Minimal social cues in the dictator game. *Journal of Economic Psychology*, 30, 358-367. 査読有
10.1016/j.joep.2009.02.002
- 42) K.Ishii (他2名)(2009). Culture and visual perception: Does perceptual inference depend on culture? *Japanese Psychological Research*, 51, 103-109. 査読有
10.1111/j.1468-5884.2009.00393.x
- 43) 高岸治人・高橋伸幸・山岸俊男 (2009) 最後通告ゲームでの意図のない不公正分配での拒否『実験社会心理学研究』48, 159-166. 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/130000303238>
- 44) T.Yamagishi (他5名)(2009) The private rejection of unfair offers and emotional commitment. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 106(28), 11520-11523. 査読有
10.1073/pnas.0900636106
- 45) 堀田結孝・山岸俊男 (2008) 最後通告ゲームでの意図のない不公正分配での拒否『実験社会心理学研究』47(2), 169-177. 査読有
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/47/2/47_2_169/_pdf
- 46) Y.Uchida (他4名)(2008) Is perceived emotional support beneficial? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754. 査読有
10.1177/0146167208315157
- 47) K. Ishii & R. Kurzban (2008) Public goods games in Japan. *Human Nature*, 19, 138-156. 査読有
10.1007/s12110-008-9034-4
- 48) T.Yamagishi & K.Cook (2008) A defense of deception on scientific ground. *Social Psychology Quarterly*, 71(3), 215-221. 査読有
10.1177/019027250807100303
- 49) C.Takahashi, T.Yamagishi (他4名)(2008) The intercultural trust paradigm. *International J. of Intercultural Relations*, 32, 215-228. 査読有
10.1016/j.ijintrel.2007.11.003
- 50) T.Yamagishi (他2名)(2008) Preference vs. strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science*, 19(6), 579-584. 査

読有 10.1111/j.1467-9280.2008.02126.x

- 51) Y.Uchida (他4名) (2008). Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754. 査読有 10.1177/0146167208315157
- 52) 内田由紀子 (2008) 日本文化における自己価値の随伴性: 日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証『心理学研究』79(3), 250-256. 査読有 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy/79/3/79_3_250/_pdf
- 53) 内田由紀子 (2008) 文化と感情: 比較文化的考察と組織論への意義『組織科学』41, 48-55. 査読なし <http://www.booknest.jp/browse/00004582?w=1880>
- 54) T.Yamagishi (6名中6番目) (2007) Culture, identity, and structure in social exchange. *Social Psychology Quarterly*, 70(4), 461-479. 査読有 10.1177/019027250707000412
- 55) 堀田結孝・山岸俊男 (2007) 互酬性と同一性保護: 最後通告ゲームにおける拒否の理由『心理学研究』, 78(4), 446-451. 査読有 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy1926/78/4/78_4_446/_pdf

[学会発表] (計115件)

- 1) T.Yamagishi (2011) Greed and fear revisited. International Conference on Social Dilemmas, 7/6-9, Amsterdam, Netherlands. (基調講演)
- 2) T.Yamagishi (2010) Micro-Macro Dynamics of the Cultural Construction of Reality: An Institutional Approach to Culture. International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia. 7/11-18. (基調講演)
- 3) T.Yamagishi (2009) Micro-macro dynamics of the cultural construction of reality. Asian Association for Social Psychology. India Habitat Centre, New Delhi, India, 12/14. (最先端講演)
- 4) T.Yamagishi (2008) An institutional approach to culture. International Congress of Psychology, ICC Berlin, Germany, 7/21. (招待講演)

[図書] (計16件)

- 1) K.Ishii (印刷中) The meaning of happiness in Japan and the United States. Pp.473-476 in K.Scherer, J.Fontaine, & C.Soriano (Eds.), *Components of emotional meaning: A sourcebook*. Oxford University.
- 2) 河合俊雄・内田由紀子 (2013) 「ひきこもり」考. 創元社. 総ページ数:184
- 3) T.Yamagishi (2011) *Trust: The evolutionary game of mind and society*. Springer. 総ページ数:192
- 4) T.Yamagishi (2011) An institutional approach to culture. Pp. 251-257 in Xiao-Tian Wang & Yan-Jie Su (eds.), *Thus spake evolutionary psychologists*. Peking University Press.
- 5) T.Yamagishi (2011) Micro-macro dynamics of the cultural construction of reality: A niche construction approach. Pp. 251-308 in M. Gelfand, C.Chiu, Y.Hong (eds.), *Advances in culture and psychology*, Vol. 1. Oxford University Press.
- 6) 増田貴彦・山岸俊男 (2010). 『文化心理学(上・下)』倍風館. 総ページ数:上巻229、下巻199

- 7) 山岸俊男 (2009) 文化への制度アプローチ. Pp.141-170石黒広昭・亀田達也編『文化と実践』新曜社.
- 8) 石井敬子 (2009) 文化と認知: 文化心理学的アプローチ. Pp.63-105石黒広昭・亀田達也編『文化と実践』新曜社.
- 9) T.Yamagishi & N.Suzuki (2009) An institutional approach to culture. Pp.185-203 in Mark A.Schaller et al. (Eds.), *Evolution, Culture, and the Human Mind*. Psychology Press.
- 10) 山岸俊男・吉開憲章 (2009) 『ネット評判社会』NTT出版. 総ページ数:232
- 11) H.Takagishi, T.Takahashi & T.Yamagishi (2009) The Relationship between impulsiveness and rejection behavior in the ultimatum game. Pp. 217-225 in G. Lassiter (ed.), *Impulsivity: Causes, Control and Disorders*. Nova Publishers.
- 12) T.Yamagishi (他3名) (2009) Solving the lemons problem with reputation. Pp. 73-108 in K.Cook, C.Sniders, V.Buskens & C.Cheshire (eds.), *Etrust: Forming relationships in the online world*. Russell Sage Foundation.
- 13) 山岸俊男 (2008) 『日本の「安心」はなぜ消えたのか: 社会心理学から見た現代日本の問題点』集英社インターナショナル 総ページ数:264
- 14) 山岸俊男・清成透子 (2008) 集団内協力と集団内信頼. Pp.125-156土場学・篠木幹子(編)『個人と社会の相克: 社会的ジレンマ・アプローチの可能性』ミネルヴァ書房.
- 15) T.Yamagishi (2007) The social exchange heuristic]. Pp.11-37 in M.Radford, S.Ohnuma & T.Yamagishi (Eds.), *Cultural and ecological foundations of the mind*. Hokkaido University Press.
- 16) 山岸俊男 (2007) 文化への制度アプローチ. Pp.141-170河野勝・西條辰義(編)『社会科学の実験アプローチ』勁草書房.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山岸 俊男 (YAMAGISHI TOSHIO)
玉川大学・脳科学研究所・教授
研究者番号: 80158089

(2) 研究分担者

内田 由紀子 (UCHIDA YUKIKO)
京都大学・こころの未来研究センター・准教授
研究者番号: 60411831

石井 敬子 (ISHII KEIKO)
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号: 10344532

清成 透子 (KIYONARI TOKO)
青山学院大学・社会情報学部・准教授
研究者番号: 60555176

品田 瑞穂 (SHINADA MIZUHO)
北海道大学・文学研究科・助教
研究者番号: 70578757

(H21 から H23 まで分担者として参画)

山岸 みどり (YAMAGISHI MIDORI)
北海道大学・高等教育機能開発総合センター・教授
研究者番号: 20211625
(H21 まで分担者として参画)